スレブレニツァで考えたこと　-　ボスニア紛争、デイトン和平合意が問いかけるもの

『世界』（岩波書店）887 号　2016 年 10 月号、103 - 111 頁

長有紀枝（立教大学）

１　二一年目のスレブレニツァ

この夏、ほぼ二〇年ぶりにスレブレニツァを訪ね、七月一一日に開催されたジェノサイドの犠牲者追悼式典に参列した。「スレブレニツァ」という地名に反応する日本人は多くないかもしれない。しかし「銀の町」を意味するボスニア・ヘルツェゴヴィナの小村で二一年前の夏に起きた出来事は、犠牲者の数に圧倒的な違いがあるとはいえ、西欧社会の少なくとも一部の人々にとっては、「ナチ・ジェノサイド」や「アウシュビッツ」と同義語にさえなっている。

「ジェノサイド（genocide)」とは、ホロコーストにより四〇人もの親族を失ったポーランド出身のユダヤ人法学者ラファエル・レムキンが、「民族・部族」を意味する古代ギリシャ語 genos と、「殺害」を意味するラテン語 cide を組み合わせて、一つの民族の破壊を指す用語として編み出した造語だ。レムキンの尽力で一九四八年に採択されたジェノサイド条約（集団殺害罪の防止及び処罰に関する条約）において、一つの集団（条約上は国民的、人種的、民族的、宗教的四集団）の全部又は一部を破壊する明確な「意図」をもって行なわれる犯罪と定義され、日本語では「集団殺害」と訳されている。

この条約採択から半世紀、旧ユーゴスラヴィア国際刑事裁判所（ＩＣＴＹ）初の、そして国際刑事裁判としてはルワンダに続き史上二例目のジェノサイドとして有罪判決が出たのが、「第二次世界大戦以来の欧州で最悪の虐殺」と称されるスレブレニツァ事件だ。

２　ボスニア紛争で発生したジェノサイド

ジェノサイド条約はその第一条でジェノサイドが平時にも行なわれうる犯罪と規定し、戦争との連関を切断した。しかし、ユーゴスラヴィア崩壊の過程で生じたボスニア・ヘルツェゴヴィナ紛争（一九九二年四月～九五年一一月）の終盤に発生したスレブレニツァ事件は、改めてこの犯罪が武力紛争と密接なかかわりをもつことを証明した。

人口四四〇万人の紛争前のボスニア・ヘルツェゴヴィナ共和国は、イスラム教徒のムスリム人が四四%、正教徒のセルビア人が三一%、カトリックのクロアチア人が一七%を占め、複合国家ユーゴスラヴィアの「縮図」ともいわれた多民族社会であり、ユーゴを構成した六共和国の中で、唯一特定の民族の故郷と定義されない地域でもあった。三民族は、都市・地方限らず、また特定の地域に偏在することなく混住し、政治的にも物理的にも単純な三分割が不可能な状態にあった。

一九九一年に発生したユーゴ解体の流れの中、隣国クロアチア共和国で、その独立に反対しユーゴ残留を求めるセルビア人が「クライナ・セルビア人共和国」を樹立すると、これに

連動する形で、ボスニアのセルビア人も一九九二年一月「ボスニア・ヘルツェゴヴィナ・セルビア人共和国」を創設、このセルビア人がボイコットする中で、翌月ボスニアの独立を問う国民投票が実施された。独立が賛成多数で可決されると、反対派のセルビア人と、賛成派のムスリム人・クロアチア人とが衝突、し烈な内戦へと発展する。この紛争は、ボスニア南西部ではクロアチア人とムスリム人の、首都サラエボと北西部・東部ではセルビア人とムスリム人の三つ巴の争いとなり、数字に諸説はあるが犠牲者二〇万人、難民・避難民二二〇万人ともいわれる、現代史に名を刻む凄惨な紛争となった。

この紛争でサラエボとともにセルビア人勢力に包囲され、その苦境ゆえ国際社会の注目を集めていたのがスレブレニツァである。国際連合（国連）の安全地帯に指定され、国連防護軍（ＵＮＰＲＯＦＯＲ）のオランダ部隊によって防御されていたにもかかわらず、一九九五年七月一一日、ラトゥコ・ムラディチ率いるボスニア・ヘルツェゴヴィナ・セルビア人共和国軍（ＶＲＳ）の攻撃にあっけなく陥落した。オランダ軍は数の上でも、装備の面でも圧倒的な劣勢にあり、北大西洋条約機構（ＮＡＴＯ）の空爆も様々な事情でタイミングを逸したからである。

女性や子ども、また一部男性は、スレブレニツァから北西に六キロほどのポトチャリにあるオランダ部隊本部に避難し、その後ボスニア政府軍支配地に移送された。しかしここで選別、隔離された兵役年齢の男性と、自力でスレブレニツァを脱出し、徒歩で五〇キロほど離れたボスニア政府軍支配地を目指した一万五〇〇〇～二万人の男性は、ＶＲＳの猛追にあい、その後の約一〇日間に約七五〇〇名～八〇〇〇名が行方不明となり、このうち約六〇〇〇～六五〇〇名が処刑されたとみられている。

ボスニア紛争初期、この地域では地元出身のナセル・オリッチ率いるムスリム人勢力により多数のセルビア人も犠牲になった。その報復として兵役年齢の男性が虐殺の対象とされたが、犠牲者の多くは軍事行動とは無関係の市民で一部少年や老人も含まれた。銃や手りゅう弾による処刑場所となったのは、絵葉書に出てくるような美しい牧草地や渓谷のほか、市民生活に直結した学校や体育館、農業用の倉庫や工場、文化センター、サッカー場などである。

殺害後は、現場付近に掘られた集団墓地に（それを「墓地」と呼ぶには語弊があるが）遺棄に近い形で、重機を用いて埋められた。重機のない現場では、被害者本人に穴を掘らせ、あるいは穴の中に立たせた上で、背後から銃殺するという残忍な方法が取られた。さらに九月から一一月には、これらの墓地を再びブルドーザーなど重機を使って掘り起こし、遺体を別の場所に埋め直すという作業が繰り返された。このことが遺体の発見と犠牲者の身元の特定を困難にしているが、他方でこの隠ぺい工作はスレブレニツァ事件の存在を否定する勢力に対し、後ろ手に縛られ背後からの銃創がある遺体とともに、犯罪の証拠とされている。「犠牲者は合法的な戦闘の犠牲者である」というスレブレニツァ否定論者の主張が正しいのなら、こうした隠ぺい工作は不要だからだ。

元バッテリー工場であったポトチャリのオランダ部隊本部跡は、虐殺記念館とスレブレ

ニツァの犠牲者の墓碑が立ちならぶ広大な記念墓地となっている。この墓地の石碑には、「８３７２…」という犠牲者数が刻まれているが、数字のあとの三つの点が示すとおり今もって犠牲者の正確な数はわからない。犠牲者の算出は、陥落前のスレブレニツァの人口と、ＶＲＳの猛攻を逃れボスニア政府軍支配地にたどり着いた生存者数の差から割り出されるが、たどり着いた生存者数の記録はなく、また避難民の流出や流入の激しかったスレブレニツァに、陥落時そもそもどれだけの人がいたのか、正確な数は現在も不明だからである。

スレブレニツァ事件の二週間後には、「嵐作戦」と呼ばれたクロアチア軍の猛攻で、今度は二〇万人ものセルビア人がクロアチアやボスニア西部から難民・国内避難民として流出する。この惨劇を経た一九九五年一一月、アメリカのオハイオ州デイトン空軍基地で開催された和平会議により三年半におよんだボスニア紛争は幕を下ろした。ここで結ばれたのが紛争後のボスニアの進路を決定づけたデイトン和平合意である。

デイトン合意でボスニア・ヘルツェゴヴィナは、ボシュニャク（ムスリム人）とクロアチア人中心の「ボスニア連邦（国土の五一％）」と「セルビア人共和国（同四九％）」という二つの主体（エンティティ）から構成され、それぞれが独自の行政府、立法機関、議会や警察を有する高度に分権化された国家となった。

和平の履行は民生面では国連安全保障理事会の同意を得て和平実施会議が設立され、絶大な権力をもつ上級代表（ＯＨＲ）が置かれた。軍事面ではＮＡＴＯを中心とする多国籍部隊（ＳＦＯＲ）が担当したが、二〇〇四年一二月以降は欧州連合部隊（ＥＵＦＯＲ）が展開し停戦監視にあたった。

国際社会による圧政とも揶揄される強大な権力のＯＨＲのもと、ボスニアを一つにするための政治システムがつくられ、選挙が実施された。中央レベルでは、ボシュニャク、セルビア人、クロアチア人の代表からなる三名の大統領会議が置かれ、輪番制で元首の役割を担った。一人の大統領による一つの国家に向けた試みは頓挫したままであるが、ＥＵおよびＮＡＴＯ加盟を目指し、多民族・多宗教・多文化という多元的社会からなる一つのボスニアを目指す試みが現在も継続中である。

３　続く遺体の鑑定と捜索

七月九日、首都サラエボから一五〇キロの地点にあるスレブレニツァに入った。その途上で立ち寄ったポトチャリでは、記念式典を二日後に控え、新たに埋葬される緑色の棺に納められた一二七の遺体が、トラックからおろされ建物内に並べられたところだった。棺それぞれに番号が振られ、氏名が記されている。遺族たちがその棺にすがって泣いている。

世界的な法医学分野における遺体・遺骨のＤＮＡ鑑定技術は、ボスニア紛争、特にスレブレニツァ事件によるところが大きいとされる。その中核を担ってきたのが、デイトン和平合意の翌一九九六年に、リヨンで開催されたＧ７サミットの席上、米国のビル・クリントン大統領（当時）のイニシアチブで、当時四万名ともいわれたユーゴ紛争による行方不明者の捜索や身元確認のため設立された行方不明者国際委員会（ＩＣＭＰ：International Commission

on Missing Persons）である。

遺体の発掘は、一九九六年から始まった。以来二〇年、現在も継続中であるが、ＩＣＭＰによれば、スレブレニツァに関連して、七〇カ所の二次埋設地が確認されている。

七月一一日の記念式典で兄の遺骨を埋葬したハフィーザさん（五八歳）。しかし埋葬といっても棺に納められているのは頭蓋骨の一部と右手の一部など計三部位のみ。いずれも異なる二次埋設地から発見された。昨年は一九歳だった甥を埋葬したという。

遺体の身元が判明した、というより遺体の一部だけがばらばらに見つかる遺体。いったいどの時点で、どれだけの部位が揃えばよしとするのか。どの時点で、スレブレニツァの墓地に埋葬するのか。これらはすべて遺族の判断に任されている。指一本でも肉親と思える人もいれば、すべての部位が揃うまで埋葬をためらう人も、拒絶する人もいる。過去二〇年にわたり繰り返されてきた、答えのない、諦めと安堵と迷いの混じる残酷な光景である。

今回の旅では、虐殺地の一つ、ブラニェボ農場で殺害された一〇〇〇名を超える遺体の二次埋設地跡を訪れた。ＩＣＭＰによれば、ブラニェボ農場の被害者は、近郊のピリツァに埋められたが、その後、四〇キロ離れた八カ所の二次埋設地に埋め直された。一次と二次埋設地間の距離が最も離れている現場である。この意味するところは犠牲者の遺体は、状態が良ければ、一カ所に完全な形で埋まっている可能性があるが、そうでなければ、最大八カ所の埋設地に他の数百人の遺骨とともに、ばらばらに埋められたということである。

そうした二次埋設地跡で牧草の刈り入れをしていたベシムさん（七二歳）に話を聞いた。戦況が悪化した一九九三年、家族とスレブレニツァへと避難し、七月一一日を迎えるが、腰を痛め車いすに乗っていたことが幸いし、ポトチャリでの選別を免れ命拾いをすることとなった。紛争終結から五年がたった二〇〇〇年、故郷に戻り破壊された自宅の修復をしながら農作業を再開したが、二年ほどたったある日のこと、突然大勢の人がやって来て（それはボスニア政府の行方不明者委員会とＩＣＭＰのメンバーであるが）遺体の発掘が始まったという。

そこで初めて、日々耕していた自分の土地が、スレブレニツァの犠牲者たちの二次埋設地であったことを知る。ベシムさんは、道路に面した四メートル幅の一角から完全・不完全な形で、五〇六体の遺骨が発見されたと、涙を浮かべながら当時の状況を語ってくれた。「二〇〇〇年に戻ってから、この一角だけ、牧草の緑が異様に濃いことには気づいていた。でもそれが何故かはわからなかった」という。チャンチャリ道路と呼ばれるこの道路沿いには一二カ所の二次埋設地が点在する。ベシムさんの土地から数百メートルの範囲にある二つの集団墓地でもそれぞれ三六二体、二四四体の遺体が発見された。一一一二体もが至近距離に埋められていたことになる。のどかな、絵葉書のような牧草地の歴史に息をのんだ。

ある捜査関係者によれば、スレブレニツァに関連した行方不明者の遺体があと一〇〇〇体、東ボスニアのどこかに眠っているという。避難途上、銃撃に遭い、あるいは戦闘や地雷で山中で息絶えた遺体は、痛ましいことに、永久に発見されることはないのではないかという。他方で、最低もう一カ所、二〇〇～三〇〇体が埋まる集団墓地が存在することは疑いな

いとされる。しかし、それが見つからない。なぜか。

４　普通の人による犯罪とコラボレーター

集団殺害同様、その後の一連の作業は、少数の軍人の手に負えるものではない。スレブレニツァ陥落の翌々日の七月一三日、約一〇〇〇名が殺害されたポトチャリにほど近いクラビッツァの農業用倉庫では、近郊のグロゴバ村に遺体が埋められた。後に掘り起こされ、スレブレニツァ南方のゼレニ・ヤダルに再埋葬されるが、この一連の作業は、数夜にわたって続いたとされる。移送の途中、移動経路にあたる町の住民が、トラックが通過した際の耐え難い遺体の腐敗臭を嗅ぎ、トラックの荷台から突き出た足など遺体の一部を目撃している。目撃者はいたのである。

スレブレニツァ事件の真相解明に向け、ＯＨＲの度重なる要請に、セルビア人共和国は事件から一〇年後の二〇〇五年、スレブレニツァのジェノサイドに直接、間接に関与したセルビア人共和国の軍人・文民一万九四七三名の名簿をボスニア・ヘルツェゴヴィナ検察局へ提出した。この名簿には、遺体の回収、収容、移送、埋設作業にかかわった民間の輸送業者やその運転手、掘削業者、洗浄業者の名前があった。スレブレニツァ事件発生後一〇年を経て、約二万人が、ムスリム人の殺害とその後の遺体の処理に関与したことが明らかとなった。しかし、これだけの人間がかかわっていても、あるいはこれだけの人間がかかわったからこそ、埋設地の全容はなかなか明らかにはならなかった。

繰り返される言葉は、「何も聞いていない」「何も見なかった」あるいは「知らない。知らなかった」である。紛争中のサラエボで、ムスリム人のみならず、セルビア人も殺されたことを最初に報道した一人というムスリム人のジャーナリストに話を聞く機会があった。「サラエボのような都会なら、人と違った意見を口にすることはたやすいし、声を上げやすい。しかし小さな町や村に行けば行くほど、人と違う意見は聞かれなくなる」。

各勢力ともに、証言者への嫌がらせや脅迫も続いた。事件の翌一九九六年、ブラニェボ農場での惨殺を海外のメディアに告白したＶＲＳ所属のエルデモビッチは、ＩＣＴＹに訴追される前、証言を止めようとする勢力に銃撃された。同様の事件はクロアチアでも起きている。セルビア人住民が惨殺された事件をＩＣＴＹで証言しようとしたクロアチア人男性が自宅に仕掛けられた爆発物で命を落とした事件もある。

ナチのジェノサイドがそうであったように、ジェノサイドや大規模な人権侵害は、計画者や実行者の外側に、濃淡はあれど、あらゆる層の加担者が存在して初めて可能となる。スレブレニツァ事件も、ムラディチ将軍やその指揮下にあるＶＲＳ部隊とは別に、（実際に手は下さなかったとしても）その外側の、一般市民の無言の協力なしには成立しなかったのだ。近郊の町にある虐殺現場の一つになった小学校の校庭に立ちながらその事実を、炎天下、一瞬、周りから一切の音がかき消えるような感覚で実感した。

さらに恐ろしいことには、ＩＣＴＹの膨大な裁判記録や証言録に立ち入ると、協力者のみならず実行者も、戦前は決して特殊な人種や人物でなかったことがわかる。親切で快活な青

年、子どもたちに空手を教え誰からも信頼されていた地域の人気者。極悪非道な犯罪人やごろつきは少ない。

ムラディチ将軍もその一人ではなかったろうか。

筆者はスレブレニツァ事件発生当時、難民支援に従事するＮＧＯ「難民を助ける会（ＡＡＲ）」の駐在員として現場近くにいた一握りの日本人あるいは外国人の一人である。事件の前年、父親の拳銃を使って自殺を遂げたムラディチの長女と、ＡＡＲの現地職員が同じ医学部の学生として親しかった縁で、筆者自身、ムラディチと事件の数カ月前に面会し、家族とともに、三時間余りを過ごしたことがある。一九九五年の三月のことだ。青く優しい目が印象的なムラディチ将軍の筆者に対する第一声は、この年一月に起きた阪神淡路大震災の被災者に対するお見舞いの言葉だった。

ムラディチは言った。「今回の戦争は、自分にとって初めての、それも自分の土地と同胞、自分の家族を守っての戦争だ。国連軍のイギリス兵の中にはフォークランドやイラクなど一二回目という軍人もいる。こうした人間にどうして自分が平和を説かれなければいけないのか、自分は自分の土地から一歩も外には出ていない」

間違いなく彼は、戦前から名の知られた犯罪者でも、ごろつきでも、いわんや殺人鬼でも、異常性格者でもなく、そして善悪の判断を放棄し命令に従っただけの人物でもなかった。この時、垣間見たムラディチの印象は、優秀な職業軍人であり、誠実で家族思いの、模範的な国民であり愛国者であった。そうした人物を冷酷、残忍、そして、残虐非道なジェノサイドの首謀者に変えたもの、それが「戦争」なのだろうか。ジェノサイドと戦争との連関は冒頭で述べたとおりである。

５　ユーゴスラヴィア人、ボスニア人

チャンチャリ道路沿いの二次埋設地を探して、スレブレニツァは初めてという運転手のＤ君とともに、幹線道路から外れて舗装されていない山道に入り込んだ。黒く焼け焦げたまま戦火の痕跡が色濃く残る家々は、二〇年という歳月が流れたことに気付かないほど、すべてが生々しい。

不安を募らせながらも車を走らせると、日焼けした農夫が目に留まった。車を止めて集団墓地への道を尋ねると、このままま っすぐ行けばよいと教えてくれる。安心したのもつかの間、険しい顔の年配の女性が現れた。「あんたたち、一体どちらの集団墓地のことを聞いているの。セルビア人かムスリムか、あんたはどっちだ」。

私の未熟なボスニア語の力でも、張り詰めた雰囲気と言わんとすることは伝わってきた。しかしＤ君の発した言葉は意外なものだった。「すべての集団墓地を探しています。僕はユーゴスラヴィア人だから」。サラエボの空港近くドブリニャ地区出身の彼は、戦争初期に父親を惨殺され、その後難民としてドイツで暮らした。その彼の口から「ユーゴスラヴィア人」という言葉が飛び出すとは思ってもみなかった。再び先を急ぐ車中、「あなたの振る舞いに驚いた」と正直な気持ちを口にすると、「ユーゴスラヴィアは、戦前の良い時代を思い出さ

せてくれる魔法の言葉だと思う」と言う。

東欧の地域研究やバルカン近現代史が専門の柴宜弘によれば「ユーゴスラヴィア人」という民族概念は、第二次世界大戦後の自主管理社会主義体制のもとで既存の民族を超える新たなユーゴ統合の政策概念として、共産主義者同盟によって導入された。思うような成果があったわけではない。しかし特に民族間の接触が頻繁な都市部で人々の間の潤滑油として機能し、民族の混住地域で両親の民族が異なる子供は自らを「ユーゴスラヴィア人」と規定することが多かった。ある地域の民族的少数者が、多数者による同化の圧力に抵抗する手段として「ユーゴスラヴィア人」を選択する場合もあった。

この「ユーゴスラヴィア人」同様、時の民族政策や政治状況と密接に関連する概念が「ボスニア人（ボシュニャク）」である。一五世紀後半以降、オスマン帝国の直轄統治を受けていたボスニア・ヘルツェゴヴィナで、一八七八年ハプスブルク帝国にその行政権が移行すると、ハプスブルク帝国は、セルビアやクロアチアの民族主義のボスニアへの浸透を防ぐために「ボシュニャク」概念を導入した。しかし皮肉にもこうした上からの政策への反発が、各民族・宗教共同体への帰属意識を一層明確にさせる結果となった。その後、一〇〇年の時を経てボスニア紛争中に、この「ボシュニャク」がよみがえる。ムスリムに与えられてきた民族概念である「ムスリム人」に代わり使われ始めるのである。

既存の民族の枠を超えるこれらの概念。しかし、戦後の国造りの鍵となりそうな「ユーゴスラヴィア人」の存在は現在、法的にその存在の余地がない。デイトン和平合意が、多民族・多文化の共生社会としつつも、国家の構成民族を、ボシュニャク、クロアチア人、セルビア人の三民族に限定しているためだ。そしてもちろんこの合意文書にある「ボシュニャク」はハプスブルク的解釈による「ボスニア人」ではない。

「停戦には成功したが、国造りには失敗」したとされるデイトン。三民族の融和・共生を特別視するあまり、融和に欠かせなかったユーゴスラヴィア人の存在とともに、いずれの民族にも属さないユダヤ人やロマなど、少数民族が政治の表舞台に立つことは叶わない法制度がしかれている。

三人の大統領はボスニア・ヘルツェゴヴィナ全域に責任を有するものの、各民族集団から選出され、すべての国民に対する責任を負っているわけではない。社会・経済的にも、ボスニア連邦内に住むセルビア系住民はマイノリティとして政治経済的な差別を受け、他方、セルビア人共和国内に暮らすクロアチア人やボスニア人も同様の差別を受けることになる。

こうした流れの中で物議をかもしているのが、二〇一三年一一月に、紛争終結以来初めて、実に二二年ぶりに実施された国勢調査である。地域の民族構成比が、議会の議席配分や公務員の採用に直結すると同時に、海外への人口流出で三民族のいずれかがその他民族を下回ると、憲法に定められた三民族体制を揺るがしかねない。その深刻さ故、未だに、結果が公表されていないが、ここで注目されるのがハプスブルクのボスニア人概念を彷彿とさせるような「ボスニア・ヘルツェゴヴィナ人」を自称する、いずれの民族にも属すことを希望しない、新たな人々が現れていることだ。

６　おわりに

こうしたボスニアの経験から私たちは何を学べるだろう。ボスニア紛争の過程において、包囲され困窮したスレブレニツァの住民が政府軍支配地へ逃れることを手助けした国連難民高等弁務官事務所（ＵＮＨＣＲ）ら援助機関に対し、ボスニア政府は、国連がセルビア側の民族浄化に加担したと抗議を繰り返した。現在シリアで起きている恐ろしい統治の手法、すなわち、他民族・他宗派に属するか、自らの支配に服従しない「まつろわぬ人々」を、凄惨な暴力により、難民や国内避難民として支配地域外や国外に流出させ、服従するか他に選択肢も行き場もない人々からなる地域で自らの支配を確立していく手法は、ボスニア紛争同様の「民族・宗派浄化」とみることができる。

この「民族浄化」をある意味で固定化させ、正当性を与えたのもデイトン和平合意である。国際社会の代表である「上級代表・ＯＨＲ」の強権の下で、すべてが分断されたままだ。この手法でしか停戦は実現できなかったとみるべきなのか。しかし「民族浄化」が行きついた先の、紛争二〇年後のボスニア社会が抱える苦悩は、自らの領域内に多様性を認めない社会の末路にも見える。

そんな中でみた光明は、自らをユーゴスラヴィア人やボスニア・ヘルツェゴヴィナ人と規定する人々が存在することだ。彼らの存在は、いつの日かシリアの和平が実現した際に、デイトン和平合意の失敗を教訓として生かすことにもつながるかもしれない。

スレブレニツァのジェノサイドから二一年。私がこの夏見た、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの姿は、「民族融和」や「和解」「共存」という言葉を軽々しくは口にできない独特の雰囲気と険しい空気に包まれていた。虐殺の現場が日々の生活空間に存在する世界、無言の協力をした人々の沈黙と記憶が息づく世界、家族のもとに帰れない死者たちがすぐ近くの山中で朽ちていく世界、夫や息子、兄弟たちの遺体を探し続け、待ち続ける女たちが暮らす世界。そこから、友好的な、明るい未来像を描くことは部外者にとってさえ、難しい。ＩＣＴＹでムラディチ被告の審理は終了した。判決は二〇一七年一一月に下される。この判決はボスニア・ヘルツェゴヴィナに、そして犠牲者と多くの加害者・加担者に何をもたらすだろう。